

みんなで生きるために いわむらのぼる 岩村昇博士



岩村 昇博士

中国とインドの間に、世界の屋根といわれるヒマラヤ山脈がある。その山脈のふもとには人口940万人のネパールという小さな国がある。国の大部分はけわしい山々でわずかな耕地で農業を営む貧しい国である。

1962年(昭和37年)ごろ、ネパールでは結核^{けっかく}、コレラ^{てんねんとう}、天然痘などの病気で多くの人々の命が失われていた。不衛生な環境^{ふえいせい かんきょう}や栄養不良、赤ちゃんの死亡率が高く、平均寿命は40歳にも達していない。

その上、お医者さんは国全体で140人しかいないため、3日間歩いても医者にかかれない人が国民の9割を占めていた。

日本キリスト教海外医療協会^{いりょう}は、そのようなネパールへ医師を送ろうとしていた。それに自らすすんで申し出たのが当時34歳の岩村昇博士である。

岩村昇博士は1927年(昭和2年)愛媛県の宇和島市に生まれた。小学生のころ、教会の日曜学校で「病^{やまい}いで倒れた旅人を助けたよきサマリヤ人」を朗読したある中学生がよびかけた。この中学生は病気で進学できない状況であった。「みなさんの中で一人でもいい、病める人をこのように救ってくれる人が出てくれば、私はどんなにうれしいか」岩村少年はこの中学生の言葉に心うたれた。

また、1945年(昭和20年)広島の高校の学生^{ひがい}のとき、あの原子爆弾の被害を受け、友人80人を失うという悲しい出来事があった。岩村昇博士は、こわれた建物に埋もれ、丸二日間意識がない状況であったが幸い助け出され命を永らえることができた。九死に一生を得たその体験から「これからは人助けのために生きよう」と決意し、医者への道をすすむことになった。

そして岩村昇博士は、史子夫人とともに18年間もネパールで病気の治療や予防活動に取り組まれた。

1974年(昭和49年)松山市の生石小学校の酒井弘子先生は海外研修のため、ネパールを訪問し、岩村昇博士にお会いした。その時、青少年赤十字加盟校として国際協力に熱心

に取り組んでいた活動のようすを書いた子どもの手紙と音楽集会の録音テープ^{ろくおん}をお渡しした。ところが、その翌日、酒井先生が宿泊しているホテルに一本の録音テープが届けられた。それは岩村昇博士からのお礼のメッセージの入った録音テープであった。

酒井先生はそのテープを聞き、あふれる涙をこらえることができなかった。そして、このテープは「岩村昇博士の心のメッセージ」として県下の小・中学校に届けられた。

『岩村昇博士の心のメッセージ』

生石小学校のみなさん、今日は。みなさんが古切手を4500枚も集めてくださったそうですね。そして、また一円募金をして鉛筆を送ってくださいました。ぼくはびっくりしました。

ぼくはもうネパールへ来て13年になりますが、いろんなことがありました。時々くたびれていやになって日本に帰っちゃおうと思ったりします。

山の中を歩いて診療を続けていますが、食べ物は毎日毎日明けても暮れてもとうもろこしばかりです。始めの2・3日はおいしいのですが、今日も明日も明後日もとなると、やっぱりお米のご飯が食べたくなりますね。そんなときには、日本でお寿司^{すし}が食べたいと思ったりして、いやになっちゃう時があるのです。

そんな時に、私は思い出しました。日本で沢山^{たくさん}の人がネパールのお友達のためにと思っ
て切手を集たり、一円募金をしてくださっている。私はそういう日本の、みなさんの大きな愛の力に支えられて、いろんな失敗をしながらも、泣き言を言いながらも、このネパールで何とか、13年どうにか、ここまでやってきました。

～ 中 略 ～

私はある時、結核^{けっかく}の患者^{かんじゃ}さんを探して、村から村へ、川をわたり、山を登っておりました。ある村で結核がひどくて重病になりましてね。喀血^{かっけつ}という、結核菌に食われた胸の中の肺から血が出るんですけれども、口から血を吐いている患者さんをどうしても病院につれて帰ってあげなくてはならない。病院まで行きますのに自動車道路はありませんし、患者さんは弱って歩けません。だれかが担いであげなくてはなりません。

ちょうどそのとき通りかかったお百姓さんが「ちょうど私がタンセンの町まで塩を（山で一番大切な物は塩ですね）買いに行きます。ついでですから、この患者さんをタンセン

の町まで背負ってあげますよ。」と言って、何と3日間、おばあさんを背負って山を下ったり登ったりしてくれました。

私は嬉^{うれし}しかったので、そのお百姓さんにお礼をしようと思って、ポケットからお金を出しかけたら、その人は怒りました。「先生、私はお金をもらおうと思って、お金をもうけるために患者さんを運んだのではありません。」「じゃあ、何のために運んだんですか？」その時そのお百姓さんが言った言葉を私は忘れることができません。

「みんなで生きるためですよ。私には体力があります。健康があります。このおばあさんには自分で歩いていく体力がない。病気になっちゃって。だから私にあるものを、このおばあさんにないものを、私に余っている体力を、このおばあさんにあげて、こうやってみんなで生きていくんですよ。」そう言って、さっさと町の方へ去って行きました。その足は素足でした。お金があればズックの靴が買えますのに。着ている服はポロポロになっています。お金があつたら、せっかくタンセンの町まできたのだから、新しいシャツでも買ったのに…。

みなさんが見たこともないネパールのお友達のために一生懸命切手を集めてくださること、一円募金をしてくださることは、自分でできることをして困った人たちのためにという「みんなで生きるため」ですね。

みなさん、どうかいつまでも元気で勉強を続けてください。それは何のためですか？。みんなが助け合って生きるためですねえ。また機会があつたら、いつか、どこかで会いましょう。それでは今日はこれでおわります。さようなら

—1974年11月18日　ネパール王国カトマンズにて—

このメッセージの中のお百姓さんとの出会いがもとになって、岩村昇博士の生^{しょうがい}涯の信条^{しんじょう}となった言葉が『みんなで生きるために』『生きることとは、分かち合うこと』である。

子どものいない岩村夫妻は、結核で親をなくして困っているネパールの子どもの12人も養子^{ようし}にして育てられた。

日本に帰ってからは、大学の教授をしながら、アジアの国々の若者を日本に招き、農業や保健衛生を学ばせる活動に力を尽くされた。

また、アジアの恵まれない国々の、貧しい人々にすすんで救いの手をさしのべるような

いし
医師の養成に努められた。

さらに、大学を退職されてからは、ネパールの子どもも一緒に家族ぐるみで、タイの農村に住み着き、保健衛生の指導に当たられた。

2005年11月27日に永眠されるまで「みんなで生きるために」の信条にもとづき、自ら汗をかいて、恵まれない人々のために尽くす生涯をつらぬかれた。

なお、このような岩村昇博士の心をうけついでいこうと、1980年（昭和55年）に松山で「岩村昇博士協力会」が結成された。そして、協力会の人たちがお金を出し合い若い人たちをネパールへおくっている。それから26年間いままでのべ126人になるがそれらの若い人たちは、2週間ほどの間、木を植えたり、トイレを作ったり、絵本や紙芝居で子どもたちと交流する活動などを続けてきた。

平成18年の今年も3月19日にネパールへボランティアとして参加した5人の若者の報告会が行われた。



子どもたちと交流する若い人たち

（平成18年1月2日 ネパールにて）

お世話になった方

岩村昇博士協力会副会長

酒井弘子

岩村昇博士協力会事務局長

篠浦千史

参考にさせていただいた本

- ・「サンガイ ジュウネ コラギ」 岩村昇博士協力会編
ーみんなで生きるためにー
- ・「山の上にある病院」 岩村 昇著
岩村史子著